



TITLE:

# 上海三次暴動と中國共產黨：上海革命の歴史的點檢

AUTHOR(S):

坂野, 良吉

---

CITATION:

坂野, 良吉. 上海三次暴動と中國共產黨：上海革命の歴史的點檢. 東洋史研究 1980, 39(3): 557-591

ISSUE DATE:

1980-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153796>

RIGHT:

# 上海三次暴動と中國共產黨

——上海革命の歴史的點檢——

坂 野 良 吉

一 はじめに

二 三次暴動の對比的檢討

三 上海解放と三次暴動

四 上海における勞・資問題と革命戰術  
むすびにかえて

一 はじめに

まず本稿の課題と視角とを明らかにしておきたい。

上海三次暴動は、北伐の時期、中國最大の近代都市でおこった民衆の革命運動であつた。その第三次の暴動は、上海市民諸階層の代表會議という形態で、市民政府を樹立した。しかし、その市民政府は、蔣介石らによる四・一二クーデターの強襲を受け、わずか三週間にして潰え去つた。三次暴動は、北伐と國民革命のクライマックスをなすとともに、革命内部の諸矛盾の焦點ともなつたわけである。

この上海三次暴動については、專論こそないものの、くり返し種々な角度から詳細な檢討が加えられてきている。<sup>(1)</sup> だから、暴動の全容はすでにかなり明らかになっている。しかし、從來までの上海暴動史の多くが、どちらかといえば、その

當事者の一つであった上海總工會や中國共產黨(以下中共と略す)、それも八・七會議派——陳獨秀らに對する奪權派——等の立場からの總括に依據し、それがために視野を大きく制約されてきたように思われる。

その點について少し述べておくと、本論で検討されていくように、上海暴動は、廣くは北伐戰爭と國民革命とによる江浙解放の一齣であると同時に、國共兩黨と諸階層連合とによる上海革命の實現形態にはかならなかった。そこでは、上海の解放と革命という二つの軸のなかで、國民革命軍、國民黨諸派、中共、上海特別市の諸階層團體等が呼應しあつて、中共の場合でも、陳獨秀らの中央委のみでなく、江浙區委から上海市委のアクチブ——この流れが八・七會議に合流していく——までが、全力をあげてコミットしていた。上海暴動は、中共を中心にみたとしても、その組織の内でも外でも、異なる諸潮流による共同事業として存在した。

したがって、上海暴動と市民政府の壊滅については、各參加團體でそれぞれ異なる總括がありえたし、現にあった。國民黨や資本團體では、勞働側や中共と對立する總括をしたことはいうまでもないが、中共の内部ですらも、五全大會までは、「大ブルジョアジーの過大評價は、小ブルジョアジーの過小評價を招いた」という批判と同時に、「上海プロレタリアートの二月蜂起が時期尚早であり、……さらに一層未熟だったのは、そこに勞働者代表ソビエト風政府を樹立しようとしたことである」という批判が共有されていた。<sup>(3)</sup>前者はのちに陳獨秀らの右翼機會主義批判となっていくものだが、その時點ではまだ、近代都市における資本側との連合戦線の立場も全面否定されるに至ってはいなかったのである。<sup>(4)</sup>

しかし、實際には、六全大會に至る過程で、陳獨秀らの立場は押しのけられ、所謂右翼機會主義批判がコミンテルンから中共に至るまでの公式見解となった。その所謂中共八・七會議派の見地だが、要するに、勞農民主獨裁ないしソビエトを至上價值とする總括であつた。そこでは本來中央と自分達との共同事業であつた上海革命の戰略的總括が棚上げにされたばかりか、他の連携諸勢力の立場は無視ないし否定され、一面的眞理のみが押出されていた。<sup>(5)</sup>

本稿は、從來までのそうした視角上の制約をとり拂って三次暴動史を再構築し、なぜ、どのような構成によって、中國

史上劃期的な都市民衆革命が勝利したか、にもかかわらずなぜその勝利が國民革命勢力の龜裂を決定的にしたか、なぜ輝かしい勝利がもろくも潰え去ったか等につき、歴史に即して考え直してみようとするものである。三次暴動から「四・一二」までをひとつなかりに理解することにより、上海暴動を一つのクライマックスとした國民革命の歴史的特質が少しでもみえてくるのではなからうか。

そうした検討と関連して、中共が、江浙區委、上海市委のみならず、中央委に至るまで、上海暴動に全力でコミットしていた點を考えておきたい。それは上海革命が、當時の中央の政權構想の核心にすえられていたためではなからうか。即ち、上海革命は、中國共產主義の今一つの途のトライアルとしてあり、かつその途のもった問題點を凝縮していたのではないかと思われる。われわれは、中國革命の既成事實の上に、農村革命ないし農民革命を中國革命の主要な様式と認めてきた。しかし、毛澤東らによる農村革命の優位は、あくまで都市變革が潰え去った結果によるものであって、農村から都市を包圍する方向のみが中國共產主義への唯一の途であつたとは必ずしも思われない。これは中國革命とその共產主義化の多様性ということになるかもしれないが、都市據點主義的變革はその後の革命過程やさらに今日までの社會變革のなかで、形を變えながらくり返しあらわれたことは既に知られている通りである。上海三次暴動史の見直しは、そのように中國再認識の一步としうるのではなからうか。

最後に、上海革命の潰滅であるが、革命戰術と無關係ではなかつたであらう。しかし、それが右翼日和見主義で説明しうるかどうかは疑問である。一九二〇年代の中國革命の存立條件や特質をぬぎにした政治的清算主義から一度脱皮し、三次暴動とその戰略を歴史の中におき返すことによって、中國現代への認識眼を少しずつでも廣げていくことができるのではなからうか。

## 二 三次暴動の對比的検討

本章では、三次暴動の對比を通じて、それぞれの特徴、意義、各次の相互関係、問題點等を考察する。

上海三次暴動については、關係した各勢力・各人物による、かなり詳細な記録、總括書、回想等が残されており、比較的精密な研究が可能になっていることはさきに述べた通りである。そこでまず、それら史料・文獻を集約しながら、三次暴動の要點を對比的に表示してみよう。<sup>(7)</sup>

三次暴動對照表

時 期	契 機	準備過程	暴動の構成	主 導 権	成果及び問題點
一九二六年一〇月 二三日夜〜二四日 (暴動のみ)	孫傳芳軍の江西での劣勢と孫の配下にあった浙江省長夏超の獨立・國民黨への歸順。夏の上海への進軍	國民黨江蘇特務委員會の成立 特務委員鈕永建らによる夏超への投降工作・共同蜂起計畫	特務委系統の武裝力五〇〇名(豫定) 中共・總工會武裝糾察隊一三〇〇名、非武裝糾察隊二〇〇〇名 資本團體保衛團五〇〇名(豫定)	江蘇特務委員鈕永建	暴動計畫の不備 軍事との有效な連關なし、民衆基盤なし 上海市民代表の自治運動の發展・市民公會の成立。總工會ゼネスト 戰術決定
一九二七年二月一日未明 ゼネスト開始 二二日午後六時 武裝暴動 二三日 ゼネスト 中止命令	二月一七日 國民革命軍第一軍杭州占領、先遣隊嘉興進出 英國の上海への大兵力派遣に對する全階層的抗議の高まり	鈕らによる孫配下の江浙守備隊への投降工作 一五日 中共中央緊急會議・一般方針なる 一八日 上海總工會各組合代表者會議・ゼネスト決議	「三五萬」労働者ゼネスト 一〇〇餘の武裝糾察隊と二〇〇〇名の非武裝糾察隊。二隻の軍艦の内應	上海總工會のインシアチブ 中共江浙區委の指導 優柔不斷	上海總工會、中共江浙區委の獨走、中央委の優柔不斷 上海市臨時革命委員會の成立。國民黨江蘇特務委・資本團體の中共・總工會への不信 ゼネスト體制の確立
一九二七年三月二一日二時 ゼネ	白崇禧軍の上海郊外龍華への到達、山東軍の	鈕ら畢應澄に投降工作 二月二三日 中共中央・	「八〇萬」労働者のゼネスト	中共中央委、中央軍事委、中共江浙	白崇禧軍の前進停止、支援要請拒絶

第3次暴動	
スト開始 二一日二三時武裝暴動	崩壊開始
江浙區委合同會議 二月二五日 中共中央 特別會議・方針とアツ ビル 三月二日 第一回市 民代表會議開催・市民 會議の準備 三月二〇日 全上海工 人緊急代表大會	
一二〇〇名の武裝糾察 隊と約五〇〇〇名の糾 察隊。商民協會の罷市 と商人保衛團の支援 國民黨便服隊 國民革命軍第一軍第一 師團	
區委、上海市民公 會、上海總工會 の成立	
國民黨左右の對立激化 上海特別市民代表政府	

右の表から、次の諸點が確認されるのではなからうか。

三次暴動は、國民黨、中共に、總工會をはじめとする民衆諸團體というほぼ同じ構成をとり、同じく帝國主義支配の足場となった軍閥の打破をめざしながら、それぞれがかなり内容を具にしていたように思われる。そのみか、内容の相違は性質の相違さえ含んでいたようにも思われる。

まず、契機の項から知られるように、三次暴動は、いずれも北伐軍情勢と密接に關連するものであった。後述するよう、上海市民革命という獨自性も加わりはしたが、暴動のみが獨自在存在したのではなく、軍事情勢が上海における革命情勢の發端となり、民衆暴動は革命戰爭への呼應として存在したのである<sup>(8)</sup>。

ただ、そのような相互關係にもかかわらず、革命戰爭と民衆暴動との結合は、最後までしっくりいつていない。第一次暴動では、暴動は夏超軍の上海攻略への補助部隊として配置され、民衆暴動としての意義を缺くことになったが、他方夏超軍は上海暴動の呼應を待つことなく孫傳芳配下の江蘇軍によって擊破された。第二次では、後述するように、兩者の提携は總工會側の一方的な見込みに止まった。兩要素の或程度の連携が存在した第三次暴動さえ、革命軍の主力であった白崇禧軍は上海郊外で労働者達の鬭争を傍觀した。要するに、革命戰爭と民衆暴動、國民黨（右派）とその軍隊に對する中

共・大衆運動の矛盾がそこに孕まれていた。

次に、時期・暴動の構成等の項から知られるように、第一次と第二・第三次との相違は、暴動とゼネストとの結合の有無にあった。第一次の場合、中共は、内部では既にゼネストと民衆暴動との結合の戦術を練りあげていたし、<sup>(9)</sup> 第一次暴動にさきだつて、紡織、電気、水道、五金等の労働組合を動員する計畫をたてていた。<sup>(10)</sup> しかし、実際にはその暇もなく、民衆的背景もない「軍事投機」<sup>(11)</sup> に加擔したのである。第二次以降の轉換は、その反省に立つものであったが、その間に、革命情勢の深化・利用の考え方でも轉換があつたと考えられる。

第一次の場合をみると、江蘇特務委員の鈕永建（江蘇省松江縣出身）を中心に、吳稚暉、蔡元培ら地元國民黨長老の名聲等によりながら、地元江・浙軍、特に夏超に對する獲得工作を祕かに進めていたが、中共は中途でそれを察知した。そこで彼らは、孫傳芳が敗戦し、夏超が國民政府側についた時に、無産階級の暴動を組織し、夏超の上海奪取を援助する、労働者ばかりでなく小ブルジョアジーや學生も動員する、一切の準備は鈕永建と共同で進める、等の一般方針を決めた。<sup>(12)</sup> しかし、當時、彼らは一般情勢の把握を缺いていた。そのため、領導權は自然鈕永建に歸屬し、その指圖のままに武裝暴動にのめり込んだのである。<sup>(13)</sup>

そうしたあらゆる不備にもかかわらず、その時中共が安易と思える行動に移つたのは、北伐への過度の樂觀があつたばかりでなく、江・浙での情勢轉機を最大限に利用し、労働運動等にあらわれていた手詰り状態を打開しようとしたためと思われる。即ち、陳阿堂事件を契機に、日本系企業へのゼネストにまで擴大した労働運動は、内外綿をはじめとする工場側のロックアウト戦術にさえぎられたうえ、國民政府との全面戦争をひかえた孫傳芳の厳しい豫防的弾壓に直面していた。<sup>(14)</sup> しかし、他面、孫傳芳の上海戒嚴政策は、上海總商會内部に反英・反孫の勢力を形成させ、資本側と労働側の接近を生んだ。九月の孫による上海保衛團解散の頃から、中共は、反英・反孫的な虞洽卿らの資本家達を革命的な左派ブルジョアジーと呼び、國民黨との連携を軸にした連合戦線の變革を期待しはじめた。さらに、北伐の進展と江西における孫軍の劣勢

は、周鳳岐、陳儀、夏超、白寶山、李寶章ら地元軍閥を動搖させ、孫傳芳留守下の江・浙奪取（『自治政權樹立』）への可能性を一氣に醸成した。<sup>(15)</sup>そしてその豫想通り、夏超が反旗を翻えし、二大隊と二千の警察官のみが守る上海へと軍を進めたため、上海政治情勢は一氣に震動した。これが第一次暴動をめぐる革命情勢であり、中共はその利用による局面の打開と、あわよくば民衆自治政權の樹立をと期待したのである。<sup>(16)</sup>

しかし、實際には、鈕永建らは民衆動員力も有効な武力もなかった。また、資本家達の保衛團は既に有名無實で、虞洽卿らも、行動力を缺いていた。更に、夏超は主力を杭州に温存して上海攻略にわずか一連隊を送ったのみで、ついに致命的敗北を蒙った。その期待された江蘇諸軍の内應もいまだみられなかった。おまけに、暴動は夏超軍壊滅の後に發動された。そうしたあらゆる誤算が重なって、第一次暴動は惨敗に終わった。中共は第一次暴動を「軍事投機」と反省したのであるが、それは民衆運動というより江・浙「光復」<sup>(17)</sup>への加擔というべきものであった。

第一次暴動の直後に、中共は、第一次の深刻な教訓をふまえて、革命戦争と結合した民衆暴動による自治政權という一般方針を確立するが、十一月初め、江西戦争における孫傳芳軍の敗退を機に、上海での變革の氣運も急速に昂揚した。それは十一月十一日頃を境に、二つの形で發展した。これは既に明らかにになっているように、一つは上海市民の自治運動であり、他の一つは總工會のゼネスト戦術の決定であった。

自治運動について若干補っておくと、第一次暴動の直後に、上海各馬路商界總聯合會（『商總連會』）によってその一般原則が主張されていた。<sup>(18)</sup>しかし、十一月十一日聲明にいたると、主權在民の原則に法った市民代表會議による市政管理に基づいて、上海における平和を確保する線が明確に打ち出された。この變革構想は、國共兩黨から勞・資・學生に至るまで、廣汎な支持を受け、さらに上海を中心とした有力商紳層による江蘇・浙江・安徽三省連合自治構想を派生させた。後者の中心となった三省連合會は、全國的革命的展望を缺き、せいぜい省自治ないし連省自治の枠内で、現秩序維持の傾向が強かったため、各層から批判された。その結果、上海における市民自治運動の主導權は革新的な商總連會路線に握られ



ていった。その路線は、その後五・三〇運動時期の工商學連合會の再開へと擴大され、そこに三省連合會をも加えて上海市民公會を形づくった。一方では、國民會議に基づき國民政府をのぞみ、他方では工・商・學連合戰線による市民自治政府をめざすことにより、國民革命期の上海市民革命の體制ができあがったといえるであろう。

こうして第一次から第二次にかけて、暴動の性格は江・浙「光復」型から市民革命型に變化したが、陳獨秀らは上海市民會議型から三省連合會型に至るまでの自治運動を熱烈に支持し、それらは革命戦争や労働運動にまさる現實的意義をもつものと評價した。<sup>(49)</sup>

次に、第二次・第三次を第一次と明確に區別させたゼネストの問題に移ろう。その事實は、一見、中共・總工會のヘゲモニー獲得、暴動の主體性確立を意味するかの如くであるが、實際はそのように單純ではなかったといわねばならない。第二次では、實は、暴動スケジュールがあつてあの數十萬規模のゼネストが始まったのではなく、まずゼネストが總工會によって一方的に發動され、中共はやむなくそれを追認して暴動を附加したにすぎない。

實は、中共にとつて、白崇禧軍の杭州占領と嘉興への前進は、全く豫想外の事態であつた(後述)。そのため、中央委は、「もし南軍が松江驛(上海から三〇キロ地點)についた時、上海ではゼネストを宣言し、無産階級・小ブルジョアジ・學生等による武装暴動を宣言する」という方針まではきめていたが、具體的な體制を準備するには至っていなかった。その方針は江浙委レベルまでは徹底されていた。しかし杭州陥落の時點で開かれていた總工會活動者會議では、即時行動の方針に變つたのである。

北伐軍はまだ上海から六〇キロ地點にあつた。且つ中共中央や國民黨、さらに上海市民公會と何ら具體的な協議もおこなっていない。それなのに、總工會のアクチブ達は即時ゼネストを決定したのである。當時中共からは、江浙區委を代表して趙世炎が出席していた。彼はその決議と一般方針のズレに氣附いていたが、労働者の行動力に押されてこれを默認したのである。ゼネスト決議は、わずかに江浙區委書記の羅亦農に知らされ得たにすぎなかった。中共中央が事態を把握し

たのはゼネスト突入後のことであった。<sup>(2)</sup> 總工會・江浙區委のこの一方的なゼネスト發動は、鈕永建ら國民黨側をだし抜いたばかりでなく、市民公會やその内部の資本側の意向を無視する結果となった。というのは、資本側では、市民自治を共同で進めながら、總工會のゼネスト方針には深い懸念を抱き、その發動を抑制してきていた。市民公會の團結を考慮して、總工會はその要請を一時うけ入れてきていたのであるが、ここに至ってついに強行突破したのである。<sup>(2)</sup>

そのような事態に臨んで、中共中央は、ゼネストを、國民黨の十月連席會議の決議に基づく民衆自治政權をめざす鬭争と評價するとともに、國民黨・市民公會諸團體に働きかけ、上海市民臨時革命委員會を組織し、鈕永建を主席におして大同團結を實現しようとした。<sup>(2)</sup> しかし、鈕永建は中共側の抜けがけ的な獨自行動を強く非難し、ついには「自分と暴徒達とは無關係である」という廣告さえだす始末であった。<sup>(2)</sup>

このように、第二次暴動では、市民革命としての條件によって暴動が新たな意義を帯び、かつ後述するように、反英・反軍閥の全階層的運動がかつてなく盛りあがっていたにもかかわらず、ゼネストと暴動の非連携、諸階層連合として中共自ら高く評價した市民公會の取り残し、同盟者の國民黨や最大の提携相手資本團體との連絡缺如等の缺陷により、行動は慘憺たる失敗に終わったのである。多數の労働者の呼應に支えられたとはいえ、第二次暴動はいかにもアブノーマルであり、かつ中共のヘゲモニーを正當には評價しにくい内容のものであった。

それに対して、第三次暴動は、明らかに中共の指導に成るものであった。中共は前二次の教訓を生かし、まず江浙區委との合同會議で統一方針を確立し、中央軍事委員會に暴動の指導にあたらせた。<sup>(2)</sup> 次に中共は、市民公會を母體に、上海の革命政黨と革命的諸階層の代表によって構成される市民代表會議を結成し、臨時政府機關をあらかじめ準備した。かつ、彼らは、上海市を七區分し、各區に労働者を主體とする區民會議をつくりあげ、近郊の川沙・奉贤・南匯等では農民協會による後援體制づくりに着手した。<sup>(2)</sup> さらに、その過程で、後述するように一定の制約附ではあったが、資本團體等にゼネストや糾察隊の武裝暴動を公認させた。

このように、第三次暴動こそが、名實共に革命戦争に呼應した民衆暴動の資格をもち、中共が準備萬端整えて、總力をあげ、イニシアチブとヘゲモニーを共に握って遂行したものであった。それは、上海市民革命のワク内に位置しながら、同時に中共の政權構想に沿った革命運動としての内實をも備えるものであった。

しかし、その大成功とみえたヘゲモニー掌握とそれまでの市民政府實現が、革命勢力内部の龜裂を決定的にしていた。上述のように、第二次の際に、國民黨長老派や資本團體は中共・總工會に不信を抱いたが、その時點では、軍閥體制が存続したため、共闘は修復され、商總連會も國民黨系の商民協會に結集して罷市に加擔し、暴動を援助した。<sup>(7)</sup>しかし、第三次暴動の勝利は、上海革命勢力の決定的分離の起點となった。國・共と勞・資はいつか分離する運命にあったというより、そこにはそれなりの理由があつて、早すぎる分裂に歸したと考えるべきと思うが、それは本章の課題としたい。

さいごに、中共と國民黨（鈕永建ら右派長老派）との戰術の相違にも注目しておきたい。鈕らは一貫して、軍閥に内應・投降を慫慂し、その歸順を政權獲得の主要な手段とみなした。即ち、上海での政治變革を、軍事占領ないし政權接收として實現し、民衆的革命をほとんど考慮していない。いな、その戰術によつて民衆運動や中共による變革を制約しようと考えたとも想像される。それに對して、中共は、軍閥の革命軍への鞍替え方式を容認せず、あくまで下からの民衆的行動により、軍閥體制を擊滅して、民衆自治の政權を樹立しようとし、<sup>(8)</sup>更にあわよくば、その市民政府をソビエト風の人民的民主權力に近づけようと考えたと思われる。この戰略・戰術の違いもまた、兩者の決定的龜裂の基本要因であつたと考えられるであらう。

### 三 上海解放と三次暴動

前章で、上海暴動は國民革命諸勢力の協力と對抗として展開したことをみてきたが、本章では、國民革命の全局より上海暴動をとらえ返してみようと思う。そうするのは、上海三次暴動が孤立的に存在したのではなく、北伐戦争と國民革

命による江・浙制覇——その中心が上海・南京解放であった——の一部であったという前提に立つからにはかならない。

江・浙作戦は、第一次北伐——反直隸戦争——の第二段階ともいべきものであった。しかし、江・浙作戦が、本來的には、國民黨右派を總結集していった蒋介石の戦略に起源したところに、それをめぐる矛盾が集約されていたといえそうである。<sup>60</sup>

當時、國民革命運動の據點は、十二月に國民黨中執委員と國民政府委員の連席會議を構成していた武漢政府にあった。ところが、武漢政府では、その方向を左右しつつあったボロジンやソ連軍事顧問らの意向が強く作用した結果、京漢線沿いの北伐を基本戦略にすえていた。その際重視されたのは、帝國主義列強との正面衝突を極力避けながら、ソ連に援助された馮玉祥の國民軍と提携することによって、まず軍閥體制を打破し、反帝民族革命を成就するということであつた。

他方、蒋介石側では、北伐の前進が、中山艦事件以來の自己の軍・政獨裁權を解消させつつあつたところから、その勢力挽回を古巢江・浙の獲得によつて果そうと考えていた。武漢一帯では、勞働者・農民の立ち上りがめざましく、中共や國民黨左派の擡頭を支えていた。それに對して、江・浙では、蒋介石と舊知の資本家達を中心に、左傾化・共產化とは異なる民族的な近代國家への途が摸索されており、蔣のヘゲモニー獲得のためには、やはり舊知の青幫・紅幫の動員さえ可能であつた。そのため蔣らは、列強の權益が錯綜・集中して、列強がそのステータス保持に萬全の體制を施していた上海方面への進出にすべてを賭けたのである。その見地から、彼は、一九二六年九月には、江蘇特務委員會を組織し、江・浙出身の國民黨長老や中共黨員に、内應工作を進めさせていたのである。<sup>61</sup>

江・浙作戦の是非は、その後も、國民黨左右兩派の係争點となつた。即ち、一九二七年一月初めの國民黨中央軍事會議でも、蒋介石は江西戦争に續くものとして、江・浙作戦を主張したが、コミンテルン代表やソ連軍事顧問は強い難色を示した。中共は、すでに第一次上海暴動に加擔し、その後も、上海を中心に、市民代表會議の政權樹立に全力で取組んでいたにもかかわらず、表向きは江・浙作戦にはネガティブな評價をとつていた。<sup>62</sup>

しかし、漢口・九江事件を境に、反帝的主權回復運動が大きく前進した。それに對して列強は部分的な讓歩の姿勢をとりながら、同時に、上海租界防衛の決意を固め、海軍力を主に、英・日・米・佛四箇國防衛協定を締結した。さらに英國は、軍艦と四、五千の海兵では上海防衛には不足するとみなし、その喪失が全列強の權益を根底から覆すであろう上海が、漢口の二の舞となることを峻拒すべく、本國・地中海からの大規模艦隊（第一巡洋艦隊、第八驅逐艦隊、空母）と、本國軍、インド軍からなる陸兵三旅團約一萬三千の派遣に踏み切った。<sup>63</sup>

そうして、上海を焦點として、對外關係は厳しい緊張の局面を迎えたが、列強共同化と武力干涉の危機に直面して、コミンテルンや中共は、「帝國主義は中國から手を引け」と主張しながら、特に反英運動に全力を集中する一方、列強から「穩健派」と注目された蔣介石派と列強との結合に神経を失らせた。<sup>64</sup>

一方蔣介石らは、江・浙作戰の進捗を期して、廣東から親信の何應欽軍を福建沿いに北上させるとともに、白崇禧軍を浙江攻略にさしむけたのである。その白崇禧軍が、大方の豫想を覆えて、二月十七日に浙江省都杭州を占領した。

杭州占領は、動搖しつつあった孫傳芳軍の解體の合圖となり、江・浙一帯に急速に革命情勢を招來させた。その革命情勢を、英國出兵に對する廣範な反對氣運と結びつけることにより、上海ゼネストが突如浮かびあがったことは前章でみた通りだが、蔣介石もその好機を逸することなく、東路方面軍に上海・南京の攻略を發令した。

その時期は、杭州占領直後に南昌で開かれた國民黨中央政治會議の頃にあたるが、その會議は國民黨（中共を含む）の内部鬭争にとって決定的な意義をもつものとなった。即ち、蔣らは、江・浙作戰の全面的發動と並行して、將來上海で、中央監察委員會を開催すること、黨務・政務の統轄機關として上海臨時政治委員會を組織することを決定した。<sup>65</sup> その兩組織こそ、のちに四・一二政變での柱となったものにほかならず、ここに、蔣介石派中に「四・一二」への萌芽が生まれたとみることができる。周知のように、蔣はその同じ日に、南昌行營内で講演し、ボロジンと武漢連席會議を糾弾し、さらに中共を、國民黨の看板を利用してその侵蝕を謀るものと非難し、その膺懲（一清黨）を仄めかした。

こうして、江・浙をめぐる情勢は急轉回しながら、新たな内部矛盾を加えていったが、その時、武漢の國民黨左派・ボロジンやコミンテルン・中共は、なお江・浙作戰にネガティブな態度をとっていたかといえそうではない。

事實の示すところからみると、中共は、第二次の暴動敎訓を生かして第三次暴動を成功させ、上海市民革命の前衛的役割を果たしながら、蒋介石直系軍より一歩先んじて（『革命軍を待たずに』）上海を解放し、左傾的臨時市政府を樹立した。

つまり、第三次暴動は、國民黨革命軍・國民黨右派とその武力である別動隊、市民諸階層との共同行動でありながら、中共・總工會は左傾化した第一師團を引きつけ、政治上での優位獲得に成功した。他方、南京攻略には、國民黨革命軍東路軍・中路軍諸部隊が動員されたが、その先取の榮譽に輝いたのは、程潛麾下の左派系部隊であった。當時、程潛は、ボロジン・左派要人から後述するような密命を受けていたとされるところから、その先取は偶然のこととは思われない。

一方、國民黨左派やボロジンらは、上海暴動勝利の同じ日に、武漢で中央政治會議を開き、左派による江・浙掌握のプログラムを決定した。更に引續き、蒋介石の外交權限を否認する一方、上海特別市臨時市政府を承認し、ついに四月七日には南京遷都を決定した。

武漢の左派諸勢力が、江・浙作戰の急轉回を旁觀したのではないことはほぼ明らかと思われるが、そのような方向轉換は杭州陷落の直後になされたといわれている。<sup>66)</sup>

丁度その頃、江・浙では、一九二六年十一月の天津會議の合意にもとづき孫傳芳軍の救援に南下していた張宗昌の山東軍が、瓦壞した孫傳芳軍の肩替りを終え、國民黨革命軍とその精強軍團との決戦が迫っていた。その緊張が、左派系諸軍の割り込みをなめらかにしたらしい。<sup>67)</sup> こうして江・浙に入りこんだ左派系諸軍——その中心が程潛軍であった——の任務は、單なる増援にとどまらず、それを介した上海・南京の先取にあつたと考えてまず間違いないであろう。<sup>68)</sup>

これらの事實は、左派の北伐戰略が部分的に修正されたことを意味するはずだが、左派の江・浙作戰の位置づけ・目標はどうであり、上述した帝國主義干涉への警戒はどう變化したのであろうか。

まず、北伐の基本戦略だが、京漢線ルートが變更された事實はない。吳佩孚を従屬させた奉天軍の南下に備える西路軍（唐生智指揮）の江・浙方面への動員はみられていない。だから、左派の江・浙作戦は或る程度限定的なものであったことが想像される。

二月末頃の時点で、上海における列強の兵力は、英國派遣軍を主力に、陸・海兵士約一萬五千、大小軍艦三一隻を數え、刻々増強中であつた。<sup>(39)</sup>したがって、左派側では、列強の武力干渉を招くような大規模な作戦を極力ひかえながら、同時に江・浙の要地を先取し、蒋介石派と列強との妥協の可能性を絶とうとしたものと思われる。即ち、左派系の江・浙戦略は、反蔣戦略とも一致した上海・南京先取戦略であつたと考えられる。<sup>(40)</sup>

次に帝國主義干渉への警戒であるが、時期を同じくした陳友仁・オーマレー協定の調印を通じて、英國といえども、その在華ステータスの防衛以上の行動には出ないという判断が或る程度成立していたのではないかと思われる。その頃、協定の評價等をめぐって、陳友仁・ボロジンに對立が生じていたともいわれるが、それは反英戦術のあり方を主としながら、そのもとでの反蔣攻勢のあり方とも關係していたようにも思われる。<sup>(41)</sup>

こうして、左派の江・浙作戦が上海・南京先取戦術として成立するが、そのなかで上海暴動が新たに脚光を浴びたと豫想される。即ち、上海では、大規模な作戦をひかえる意味で、上海内部からの民衆の革命的な呼應を重視し、それを上海先取の戦術にくみ込んだのではないかと推測される。

當時、革命の據點はあくまで武漢にあり、京漢線沿いに政權を擴大しながら、反帝的で、農業革命と國家資本主義に基づく非資本主義的な民主國家の樹立がめざされていた。<sup>(42)</sup>基本線がそうである以上、上海での諸階層連合による民衆の下からの政權行動は、原則的には基本戦略の枠外に位置づけられ、中共がそれに没頭すればする程、武漢・上海の二極化現象が擴大せざるを得なかつた。<sup>(43)</sup>しかるに、左派の上海先取戦略を分擔することによって、今や、中共が熱心に追求してきた上海革命が、國民革命の全體的齒車に噛み合うに至つたといえるのではなからうか。

左派の南京・上海先取戦略と中共の上海革命とが結合する時點は、少くとも、二月二十三日の中共中央と江浙區委の合同會議が二月二十五日の中共中央特別會議の時點以降であらう。瞿秋白の「意見書」中に示された新政策は、その一端をうかがわせる。そこでは「上海市民は勞働者階級を指導者とし、武裝暴動を起こして北伐軍に呼應し（歡迎するのではなく）、自發的に（市民公會の名において）上海市民代表緊急會議を召集すべきである」となっていた。また別の箇所では、「つまり北伐と暴動の目的は、上海に市民代表大會の政權を樹立し、反帝國主義的民主獨裁制を樹立し、漢口國民政府を擁護・支援し、上海租界を回收することである」となっていた。そのような立場より、中共は、鈕永建らによる畢庶澄投降工作を察知しながらも、その方式での政權の接收努力を無視し、軍閥擊滅による市民代表會議政府——瞿秋白の所謂國民革命のソビエト——の樹立に全力を注いだし、白崇禧軍の上海到達の一步手前の時點で暴動を發動したのである。

前章で、第三次暴動こそがまぎれもない中共ヘゲモニーによる市民革命型の革命運動だと述べておいたが、それは上海先取の任務をも帯びたものとして存在したと考えられる。そのことによって、第三次暴動では、共闘體制の存続にもかかわらず、しだいに對抗面が顯在化していったと考えることができるであらう。

こうして、ボロジン、左派、中共、それにおそらくコミンテルンも、南京・上海の先取を通じて、帝國主義の武力干涉を不可能にさせながら、上海租界の回收、諸權益の回收（(44)『不平等條約の撤廢』）を實現し、帝國主義支配の牙を抜こうと考えたのではないかと思われる。

左派のそうした南京・上海先取戦略を保證するために、その要として祕かに追求されたのが、程潛軍を前面にして、武漢政權と上海の中共中央がそれをサポートする豫定であった南京「政變」計畫であつたと考えられる。(45)萬一それが現實に遂行されていたとすれば、左派軍による右派軍の武裝解除ないし蔣介石の拘束等によって、宥和的な改良主義を押えて左派的ヘゲモニーが江・浙に成立していたとも考えられる。第三次暴動が孕んだ厳しい對立の根據は、このような深層にまで及んでいたのではないかと考えられる。



次に、市民革命の方式での上海先取への全力傾注という共通性のもとで、中共内部に、連合戦線重視の立場と急進的な變革を摸索する立場とが分化した點を確認しておきたい。前者は中央委の指導部であり、後者は瞿秋白や江浙區委・總工會のアクチブに屬したと考えられる。

前者では、市民代表會議に、鈕永建ら國民黨長老連、虞洽卿・王曉籟ら資本團體有力者達を廣汎に結集させ、彼らと國民黨連合の力によって右派系軍隊の反動化をチェックしようとしたのに對し、後者は大資本の優柔不斷に不信を抱き、その右派との結合による對外宥和と非民主的な改革を警戒し、反帝的で民主的なソビエトへと基層權力（＝市民代表會議）を強化しようとした。<sup>(47)</sup> 中共の指導體制内では、兩傾向が拮抗しながら、第三次暴動が發動された。その結果、表面的には中央の統制が存在しながら、大衆行動と接したレベルでは、勞働者を指導者とし、小ブルジョアジーと提携した人民民主權力への志向が強まり、資本團體等に強い不安感を抱かせたことは否めない。

最後に、本章と關連する限りで、上海革命崩壞の條件、視點をかえれば「四・一二」成功の外的條件を簡單に一瞥しておきたい。結論を先に述べるなら、上海革命が左派勢力の江・浙戰略の一部であった以上、その全體戰略の保持・發展こそが上海革命の成否の鍵であったと考えねばならないのではなからうか。

蔣介石が三月二十六日に上海に到達して以來、次々と打った對抗措置や、中共を中心とした上海革命側の弱點も勿論無視さるべきではない。しかし、上海革命の崩壞＝反共的國家主義的改良主義の制霸を、單なる力關係や日和見主義から説明するだけでは不十分であろう。後者に關して言われた中共中央の錯誤も、大衆に依據したか否かの政治モラルの問題にのみ限らず、左派、總戰略との非連携という面にまで深められるべきではなからうか。

上海革命崩壞を外的要因に即してみれば、次の三點を分歧點としてあげられるだろう。①、三・二四南京事件による左派の南京「政變」計畫の破綻。<sup>(49)</sup> ②、親共的な第一師團の上海からの離脱。③、蔣介石派の四・九南京政變による南京における左派陣營の壊滅。<sup>(49)</sup>

①の南京事件の真相は必ずしも明らかでない。しかし、その思わぬ突発事件が、結果的には、左派戦略の要として祕かに進められてきた南京「政變」劇を水泡に歸せしめた。蔣介石は南京を素通りして上海に去ったばかりでなく、その間に蔣の親信部隊が左派包圍の布陣を整えた。

②だが、三月二十七日前後、薛岳が中共中央を訪れ、蔣介石派の反共策謀と第一師團への移動命令を伝え、蔣介石逮捕の鬭争を熱心に勧告した。しかし、中共は、コミンテルンの意をうけてであろうが、直接的衝突を極力回避した。南京事件による五列強共同行動の機運が、コミンテルンをして、國民黨の早期分裂を極力回避させたのではないかと推測される。

③の点であるが、左派の南京遷都決議によって、南京の歸趨が一躍焦點となったが、蔣介石は四月七日南京へ向うや、電光石火、程潛の第六軍を武装解除して放逐したうえ、南京に勢力を扶植しはじめていた國民黨左派の黨部、中共南京支部、労働運動を一掃した。その右派の巻き返しの露拂い役を演じたのが、青幫や右翼的な組合まがいの集團であった。

こうして、上海革命を支持する軍事的・政治的布陣は喪われ、その外堀はほぼ埋められた。その時点で、もはや上海革命内部の強化のみでは、劣勢は蔽うべくもなくなったといわざるをえない。

一方中共だが、南京「政變」支援のために、彭述之を特派員として送りながら、のちに「上海第一主義」と指斥されたように、全國的視野を缺いたばかりか、その合理的戦術への過信のためもあってであろうが、一種謀略的な反蔣の政變の計畫には消極的であつたらしい。その結果、決定的機會は逸失されることになった。<sup>60</sup>

しかし、蔣介石派の上海革命切り崩しが本格化するに及んで、中共は、ついに起死回生の「反蔣政變」をコミンテルンに直言した。<sup>61</sup> さきに薛岳の申し出を退けた中共が、二千餘の武装糾察隊を動員して、右派軍事勢力に挑むという皮肉な立場となったが、敗殘軍閥と違って、國民的譽望を背景にした右派軍との鬭争は、危険要因が大きかった。その間に、白崇禧軍は周鳳岐軍の支援を確保していたし、さらに何應欽・李宗仁軍の増援さえ不可能でなくなり、且つ列強もまた蔣介石派への支援空気を強めていた。そのため、コミンテルンは中共の反蔣計畫を中止させ、武器を隠匿し、緊張緩和策を指令

したのである。<sup>52)</sup> だから、コミンテルンのこの指令が上海革命挫敗の要因などでは決してなかったというべきで、逆の事態になつていれば、敗北はもっと早まつていたことは推測に難くないであろう。その劣勢をたて直すために浮かびでたのが、切り札汪精衛の影響力を利用して國共連合を修復し、右派反動化を堰き止めようとした所謂汪陳共同聲明であつた。

#### 四 上海における勞・資問題と革命戦術

本章では、上海革命の主體的條件と同時にその挫敗の内因を考察し、あわせて中共の革命戦術を點検する。

まず、本章の前提を若干述べておきたい。上海革命は、國民革命の全局からみれば、明らかに局地的なものであつた。しかし、國民革命の方向性の面では、上海革命は單に局地性にとどまらなかったところに、それがもつた潛在的可能性の問題があつたと思われる。即ち、國民革命が、革命戦争に媒介されながらも、本質的には都市的變革運動を源泉とし、そこから將來的ビジョンを汲み取つていたものだけに、都市的變革のセンターとなつた上海革命は、民族民主的な革命の動力源であり、かつそこでの問題は國民革命の本質的問題のさきぶれにはかならなかつたといえよう。

それでは、上海を焦點としてみた場合の國民革命の基本問題とは何であつたか。いいかえれば、上海革命の基盤はどこに求められるであろうか。それは一つには、上海が内外資本主義が活動する一大センターであり、上海政治過程はその競合から激成される民族革命運動の坩堝であつたということと関連し、他の一つには、上海革命が他地域に先だつて近代的に再構成されつゝあつた社會關係の中心をなした勞・資兩階級によつて擔われたことに關わると思われる。

前者であるが、上海には、一九三〇年代前半、代表的な一二の商工業都市の統計で、工場數の三六%、勞働者の五三%、資本の六〇%、生産の六六%が集中してゐた。紡績設備の四〇%、絲織生産の七四%、麵粉生産の四〇%、貿易の四〇%強が集中してゐた。また、組織勞働者では、一九二七年當時で、二八〇萬人中八二萬人を占めた。さらに、上海總商會は、地方的團體ながら、さながら中國資本家階級の總本山であつた。しかも、中國の工業の代表であつた紡績を例にと

れば、中國系二四工場七七萬鍾強に對し、日・英工場三五箇所一一六萬鍾であつた。<sup>63</sup>

次に後者の事實に關してであるが、われわれは、とかく勞・資對立の視點にほとんど無條件にとらわれてきた。たしかにそういう面もあり、「四・一二」等はその要素を考慮しないでは理解できないであろう。しかし、上海政治過程で勞・資對立が基本であつたというのであれば、五・三〇運動以來の勞資の矛盾をたどりながら、トロツキー的視點で上海革命の問題を總括して事足りるであろうが、それでは階級矛盾にもかかわらず國民的連合戦線が繰り返し修復され、資本團體が、各層毎に對應の差こそあれ、ポジチブな革新的作用を分擔したことの意味が見落されることになりはしないであろうか。そうした前提ゆえに、從來の研究では、資本家團體をして、反動的で多分に豫防的な反革命に驅り立てた革命側の戦術上の問題が等閑に附せられてきたように思われる。

ここで、今一度、上海革命の構造と戦略を極く簡単に整理しておこう。まず第一に、それは、第二次暴動より以降、本質的には諸階層連合の市民革命としての資格を保持した。第二に、その市民的連合は、工商學連合の市民公會に擔われたが、その根幹は總工會と商總連合の周りに形成された勞・資提携であつた。しかるに、勞・資關係は、「五・三〇」以來の相互不信に加え、「五・三〇」一周年以來續發した未曾有の大事議によつて、かつてない緊張を孕んでいた。<sup>64</sup>さらに、「武漢工潮」の衝擊は、勞・資關係に陰翳を投げかけ、<sup>65</sup>市民公會内でも、上海特別市組織大綱や勞働者のゼネストをめぐる意見の分歧が生じていた。それにもかかわらず、中共は、連合戦線と勞・資提携に至上の地位を與えてきたのである。

その後、第二次暴動では、總工會と中共江浙區委の抜けがけのゼネストによつて、國民黨長老のみか資本團體中にも不信感を残した。しかし、革命戦争が上海に及ばんとし、手負いの山東軍のあがきに不安が高まるなかで、勞働者のゼネストも市民自治實現の實效ある手段としては無視できなくなつたと思われ、資本側では、國民黨を介して、ゼネストを政治目的のみに限定させることによつてそれを是認した。<sup>66</sup>一方、中共や總工會も、總工會の産總會議や工聯會議の系統を通じて、經濟ストを一切制限し、<sup>67</sup>政權鬭争を通じて經濟要求を實現させる戦術を採用した。<sup>68</sup>こうしてみた限りでは、中共の方

針には、かなり柔軟な現實性が備っていたといえそうである。

次に、これと関連して、中共中央の上海革命の總戰略を整理しておきたい。

「四・一二」まで上海に位置した中共中央は、中國共產主義運動のセンターでありながら、その關心や統率力は、どちらかといえば、中國資本主義とプロレタリア運動の基地上海に集中された觀があつた。廣東での農民協會運動や省港罷工、武漢・湖南の大衆運動等、中共の積極的な關與が知られているが、それらは多分にボロジンや廣東・兩湖の區委の獨自性に依據していた。また、この北伐期には、中共中央は勞働運動と市民自治運動の前進を「革命的上海」の到來と評價するに至り、その先進性のうちに新しい變革の展望を描いた。<sup>69</sup> 即ち、「上海第一主義」といわれた立場をとるに至っていたと考えられる。

當時の中央の革命戰術は、既に述べてきたように、革命戰爭に呼應した民衆暴動と國民的連合戰線との結合から成っていた。中央の路線史をみると、統一戰線と武裝暴動との間を幾度となく揺れ動きながら、五・三〇運動の教訓を媒介にしてこの二方略の統合にゆきついたと思われる。

即ち、五・三〇運動の平和的な反日・反英・反軍閥鬭爭の挫折は、プロレタリアヘゲモニーの必要性とともに、合法的運動のみの限界を痛感させ、ゼネストと暴動の指導機關として軍事委員會の創設に導いた。<sup>60</sup> しかし、北伐開始直後の中央委第二回擴大會議では、國民的連合戰線による民衆的革命の再評價となり、「一切の政權を民衆團體の連合會議に歸す」を基本方針に掲げた。<sup>61</sup> その立場から中共は、國民革命を北伐に矮小化する危険性をたえず警戒しながら、連合戰線の早期弱體化を招く内部鬭爭を慎重に避けようと努めてきた。連合戰線の優先は資本團體への迎合になるのではないかという疑念に對しては、國民革命の二つの道を提示して、プロレタリアヘゲモニーを掲唱してきた。<sup>62</sup>

中共（中央委）のその戰略は、半植民地的で半封建的な中國では、帝國主義と軍閥との鬭爭が當面の優先課題であり、勞・農の利益に立った資本金・地主との鬭爭のみであつてはならないという立場に基づくものであった。それは、國內の民

族資本主義の未發展故の階級對立の未熟に、他方での帝國主義抑壓に對する全階層的抵抗の普遍性という認識にもとづいていた。陳獨秀によって代表されたこの理論は、彭述之から瞿秋白まで共有したと思われるが、中國資本の原蓄過程に規定された資本勢力の軟弱・二面性のために、特にブルジョア理論の部分で大きく振動した。その試練を経て、中共はプロレタリアヘゲモニーの理論に到達したが、中央は結局資本勢力との連合戦線、したがってそれに附隨した二段階革命戦略をついに放棄しなかつた。<sup>(63)</sup>北伐期にも、彼らは、「共產黨が政權をとるのはプロレタリア革命の時代になってからであり」、「現代は國民革命の時代であるから」、「資本主義を經過しないで、半封建社會から一舉に社會主義社會に入るような幻想をもたない」と表明した。<sup>(64)</sup>

上述のように、上海は中央の戦略にとって好個の實驗場を提供した。産業の發達は、近代プロレタリアートの比類ない結集と自覺を可能にしたし、資本諸團體も經濟的自由と政治革新に積極的であつた。とくに總商會が分裂し、その非主流を中心に反英・反孫傳芳の氣運が高まるにつれ、それが上海革命にプラスに働きはじめた。また、兩階級の周圍には、ラジカルな中間層が廣く結集し、上海ないし江・浙・安徽の地方自治という形で、民主的政權への志向が高まつていた。中共はそれらをすくい取つて上海市民自治政府の旗幟を掲げたのである。<sup>(65)</sup>當時全國的な革命の中心が武漢にあつたにもかかわらず、中共がそこには特派員のみ送つて遠隔指導するにとどまつたのは、そうした理由によるものであつたと考えられる。

中共の革命戦略——上海第一主義——が、爾來右翼機會主義と糾弾されてきたことは周知の通りである。それはソビエト政權や武漢政府ないし人民革命論の立場に即した限りで妥當ではあつたかもしれないが、その歴史的判斷は當時の上海社會の狀況から與えらるべきものではなからうか。

ただ、本稿の紙幅の關係上、この問題の全部を一舉に解決しつくすわけにはいかない。そのため、ここでは以下の三點から判斷材料を引きだしておきたい。

第一は、上海の視角よりみた中國の反帝・反軍閥の基礎だが、毛澤東や吳玉章らも認めたごとく、それは自立的な近代「資本主義」經濟確立の問題ということになる。本稿の立場とするところであるが、國民革命史は「眞正國民黨」に矮小化されるべきでもないし、統一戰線の三段階論から勞農民主獨裁或はソビエトを望む見地のみに制約されるべきでもないようにも思われる。その點では、平心の「ブルジョア階級とプロレタリア階級の二重の指導は、革命の進行過程で決定的な推進作用を果した。この二重の指導が分裂した時が大革命の退潮期であつた」とする指摘は傾聴に價するのではなからうか。<sup>68</sup>

第二に、上海資本勢力の動向だが、すでに一定の線を示しておいたので、その確認から續けよう。資本勢力は、上海革命と市民政府に對して、第三次暴動直後の三月二十三日以降、上海商業連合會を結成し、蔣介石への經濟援助に踏み切り、市政府から退出した。<sup>69</sup>青幫を反共部隊として養つたのも彼らであつた。<sup>70</sup>たしかにそのような行動はあつた。しかし、それはあくまで結果であつて、そこには資本團體中の主導權の移動があつた點にも注目しておかねばならない。商總連會は、第三次暴動までは、商民協會の組織化を或る程度受け入れ、罷市の形で暴動を支援した。それによる市民公會の團結が、保守的な銀行・錢業兩公會が勢力を占めた總商會をも自治運動の尻尾につかせて、反勞働者的な反動をチェックしてきていたことは既にみた通りである。

結局、その間の微妙なバランスが崩れて、資本勢力が、勞働者強大化による資本への攻勢に機先を制する形で、總商會へゲモニーにより、反共行動に大同團結したと考えざるを得ない。その邊の事情を示唆するものが、「四・一二」の直後にてた「主要工業界の宣言」(『哀鳴』)であるように思われる。

それは棉紡織・絹織・麵粉三業の一般社會へのアピールで、外國資本の壓迫、軍閥による連年の戰亂と國內の不統一、それに頻發する勞働爭議等による産業停滯を、社會問題の根因とし、その打開のために社會と國家の強力な支援を求めるものであつた。それが銀行公會・錢業公會の機關紙や『國聞週報』に一齊に掲載されたところからも、その影響力の大きさが豫測されるところである。<sup>72</sup>

その問題を、統計表等を逐次検討しながら考察するだけの餘裕がなくなつたので、細かな經濟分析は他日を期し、ここでは、民族工業の基幹をなした棉紡織業を中心に、一九二五—二七年をピークとした國民革命運動とその全國化との連關性について考えてみたい。その場合、民國十一年以降の第一次棉業恐慌の影響が焦點になるように思われる。

華商紗廠連合會報告、李達や龔駿の著作、『民國經濟史』や嚴中平の研究等を對照してみると、統計に若干の異同がみられるものの、民國十一年前後から民國十六、七年迄を、ほぼ共通して民族工業の最初の危機ととらえている。即ち、民國四年頃から民國十年頃まで謳歌された民族資本主義の黃金時代は早くもかげり始め、この期間には、工場、紡錘數とも一時的減退ないし深刻な停滯、伸び率の遲鈍等を呈した。一九一八年の稅則改訂以降、外國棉絲の輸入が減少を辿つていた時だけに、民族紡の不振は極めて衝擊的であつたと豫想される。<sup>74</sup>

棉業危機は一九二三年にはピークに達し、脆弱な民族工業は或は停業・倒産し、設備の遊休や抵當入れが激増した。<sup>75</sup>その結果、二二年末には、紡績連合會による四分の一操業短縮、翌年の二分の一操短・夜業廢止決議に至つた。棉業恐慌は、同時に麵粉業その他の産業の不振・停滯と並行していた。しかし、職工數・製品販賣額等のどの方面をとつても、紡織業が國民經濟の中樞を占めただけに、その影響には深刻なものがあつたと思われる。

ところで、その危機は、外國資本の回歸、なかでも日本を先頭とした在華紡の急増と、他方での棉花高・棉絲安に起因していたことは既に知られている通りである。特に日本資本は、蓄積された資本力と不平等條約を背景に、原料の安定供給を確保し、華商紗廠連合會の生産規制に左右されることなく、不況知らずの躍進を續けた。むしろ、民族紡の苦況を利として、その併呑・買収さえ行なつた。そのため、民族紡サイドからは、「市場には日本棉絲があふれ、ダンピングで押しまくつてくるため、民族紡は進退窮まり、ついに英國數工場の下位にさえ甘んじかねない」という悲鳴さえあがつた。<sup>76</sup>

その結果、民族工業は國家・社會・金融界の支援を懇求する一方、從來以上に民族運動による外貨抵制や外國資本への非協力運動（『經濟絕交』）に大きな期待をかけた。<sup>77</sup>また、銀行公會や總商會は「棉業救國」のキャンペーンを張り、學生



・労働者も經濟界の生存鬭争に熱い聲援を送った。<sup>(79)</sup>

この運動がより合わされて主權回復、國家統一と政治革新への大きなうねりがつくりだされ、たびたびの内部亀裂に直面しながらも、たえず民族と革命とをめぐる國民運動を修復させ、ついに北伐戦争に際して、革命の全國化を下から支えるまでになったのである。<sup>(79)</sup>

民族資本の積極的な役割にはこのようなものがあつたが、それを何がどの方向に組織していくかという問題に、新中國の將來像をめぐる分岐があつたと思われる。當時、民族工業は、労働運動という新たな難關にも直面し、その軟弱をさらけだし始めていたが、「武漢工潮」は民族工業の前途に不吉な豫感を抱かせた。その危懼が、資本勢力をして蔣介石の非共產的な勞資協調的全民革命への注視を生みつつあつた時、上海では勞資協調の掛け聲とはうらはらに、市民政府のソビエト化という形でセクシヨナリズムが顕在化し始めた。そこで、資本側は、産業擁護を蔣介石の國家主義に託したのであつた。<sup>(80)</sup> その限りでは、資本側の讀みは的中し、關稅自主權等の段階的回收、國家統一、強權による階級調和の實現等により、民國十六年より民族紡績業には轉機が到來し始めた。

最後に労働者の動向だが、民族工業の危機は、失業・支拂い低下として労働者にも波及したことはいうまでもないとして、ここでは組織實態と運動論に限って若干検討しておきたい。

『上海總工會の報告書』では、上海のあらゆる種類の労働者を一二五萬程度として、その八二萬が組織され、第二次暴動ではゼネストに最大三六萬、第三次暴動では八〇萬が結集されたとある。當時の日本等と比べたら、驚嘆すべき成績であつたといえるが、そうした陣容が、わずか一年程度でできあがり、組合數では七倍化、組合員數では二〇倍化した點に若干考慮を要するように思われる。この擴大は、總工會の新指導組織體制に負つていたとともに、革命情勢の昂揚が労働者をして企業や職場單位でそっくり組合に加わらせたことにもよるものであつたと思われる。また、日本系企業を除けば、工頭等の中間部分が組合の仲介をなしたり、總工會側の彼らや工場監督への集中攻撃が功を奏したとも指摘されている。中

共江浙区委は、その結果、わずか一七二〇名の少数エリート集團からプロレタリア的前衛黨に脱皮した。しかし、いずれにしろ、この急膨張には強さと都合わせのもらさが含まれていたように思われる。<sup>(81)</sup>

その點で氣になるのは、中共・總工會のゼネストに際しての政治スト戰術である。經濟要求をおさえて、政權鬭争に集中させ、革命によって經濟的要求を實現させるという方針であったが、果してそれをうけとめる素地がどの程度あったかという問題にほかならない。

當時勞働問題をたんねんに追っていた『嚮導』と『滿鐵調査月報』によってみると、一九二六年の大爭議は、災害・兇作による米不足と米價騰貴、銅元下落による物價昂騰、それらによる實質賃金の大幅低下に起因した。従って、例えば二十六年六月の一〇七工場の爭議中、九九%までが經濟ストとされ、そこから勞働者の團結權や待遇改善への要請が高まったといわれる。上海勞働運動の躍進はそのたゆみない權利鬭争によって支えられたのであり、上海總工會がそれらを一一箇條の統一要求にまとめた頃が運動としては一番安定していたように思われる。<sup>(82)</sup>

しかし、日本企業から開始されたロックアウト戰術が、勞資の激突へと向かい始める頃から、陳阿堂事件も重なって勞働運動は政治的・民族的色彩を帯び始めた。その折にまた、北伐戰爭と國民革命が上海にも波及しはじめ、反孫傳芳鬭争が焦點になってくるにつれ、總工會の勞働運動指導には政治主義が顯著になり始めた。<sup>(84)</sup> その政治主義路線が、勞働者の切實な經濟要求（『上海の社會問題解決』とは一定のズレを含みながら、勞働者を厳しく鬭争のろつばに驅り立てていくことになったのである。

橘樸が指摘しているように、蔣介石派はその間隙を巧みに衝いた。彼らは、前年末頃より、資本家層の民族産業擁護と勞資協調への傾斜に呼應し、階級調和的全民革命論を展開していたが、上海では、總工會が指導してつくりだしてきた勞働者の政治的・經濟的統一要求のなから、政治的部分を抹消し、經濟的要求をいち早く法制化してみせた。そうして勞働者の切實な要求を汲みあげると同時に、全民革命による政治・經濟の自立的發展を強く吹き込みながら、勞働者への浸

透に或る程度成功していったのである。<sup>(89)</sup>

「四・一二」が暴力による革命抑壓であったという事實に變りはないのだが、上海の革命的労働運動の急落と労働者の民生主義的組合への結集化には、青年期の上海労働運動におけるそのような戦術上の問題も全然無関係ではなかったのではなからうか。

こうして諸事實をたどってみた時、上海革命という視野に即した限りでは、中共中央の戦術は、論理的透徹とまではいえないまでも、至って現実的センスに富んでいたように考えられる。前章でみた如く全國戰略上の缺陷や、農民組織化の弱體は大きかったとしても、中共はまだこの時点では致命的な右翼機會主義にまでは墮してはいなかったと考えられるのではなからうか。その危機が眞に生じるのは、「四・一二」以後、とりわけ馬日事變後の武漢においてであったように思われる。<sup>(89)</sup>

#### むすびにかえて

以上で上海三次暴動史の分析を終える。本稿では、事件そのものの解明を主眼としなかったため、ふれないで終った諸點も多い。また、勞資問題の具體的統計分析は後日の課題として残した。

すでに規定の紙幅を大幅に超過しているので、三次暴動の總括は第三、第四章末尾邊の要約をもって當てることとし、以下若干の紙幅を使って、本稿の問題意識に關わる點を論じて結びとしたい。

本稿では、三次暴動を、中國の近代都市を據點にした民衆の市民革命の成長過程として検討してきた。そして、本論部分では、結果的に、陳獨秀らの路線を高く評價し、總工會や江浙區委のアクチブラによるソビエトへの志向を批判的に扱ってきた。しかし、それは、あくまで當時の上海の社會條件に限ってみた評價であって、革命の現實の中でそうした合理的で生産力主義的な裁斷が萬能の杖たり得るか疑問がないではない。即ち、總工會等の行動力なしに、上海革命のあれは

どの前進は生まれなかったようにも思われるのである。

それはともかくとして、注(6)で述べたように、國民革命は上海革命のほか、政權・國家の中心をなした武漢政府、廣東・兩湖等での農村革命等が組み合わされた多重構造の革命であった。その點からみると、中共の上海革命戰略——上海第一主義——は、全國的視野の點で大きな缺陷をもっていたように思われる。

陳獨秀らに關していえば、上海が無數にあつたのではない以上、その革命的上海を全國化する保證が不可欠であつたと思われるが、その展望は結局諸階級連合構想をでなかつた。即ち、種々の革命ヴィジョンの對抗の直中であつて、國民會議による人民國家の實現のみでは現實性が薄く、武漢政府の強化との並存における民衆政權の強化にしか活路がなかつたように思われる。しかし、彼らは武漢政府強化の重要な機會を實らせることに失敗した。

他方、ソビエトへの志向であるが、上海が一九一七年のペテルスブルグやモスクワたりうるかどうかの判斷が省略されていた點の問題は大きい。しかし、當時の共產主義政治理論がソビエト革命至上主義に立脚していた事實を考えると、彼らを小兒病と批判できないであらう。彼らにとって、民族的な民主革命における至高のものは勞農民主獨裁であり、その條件があると判斷されたが故にソビエト的政權を志向したものにほかならない。それはコミンテルンの第七回ブレナムの決議によつて原則的には正當化されていたものであつて、スターリンですらその誤りを回避しえた保證はなかつたといわねばならないであらう。<sup>(8)</sup>

上述の二方向性での難問は、「四・一二」の痛恨の敎訓をうけて、武漢政府の自存政策<sup>(9)</sup>の形で、一步解決に踏み出すかにみえたが、それも馬日事變によつて挫折せしめられた。そのことが、ボロジンや陳獨秀らをして、現實政治への適應性を失なわせ、農村からの反帝的かつ反近代の急進變革にリーダーシップを譲りわたさざるをえなくさせたように思われる。

## 註

- (1) 種々な角度ということだが、關係文獻は註(7)を参照していただきたいが、大別して次のようになる。(イ) 中共・コミンテルンの立場からのもの。前者は、上海總工會や中共アクチブの立場に依據し、陳獨秀路線を批判する諸方向をすべて含む。後者ではミフ『中國革命』等に代表されるが、今日のソ連では後述のようにすでに新しい見地が支配的になっている。(ロ) (イ)に對する内部からの批判の立場。陳獨秀やトロツキーからの批判はよく知られている。陳は最後にトロツキーに傾斜していたが、兩者の立場は本質的には同一ではなかった點は本文中でふれることになる。(ハ) 國民黨蔣介石派の立場からのもの。最近臺灣ででた蔣永敬・李雲漢・郭華倫らの中共史がそれにあたる。(ニ) 第四の立場ともいふべきもので、例えば最近の香港やソ連での研究傾向がそれに當ると思われる。ただし、それらにつながるような見地は、すでに當時からあり、(イ)、(ロ)の非主流的見地ともいふべきものや、客觀主義的批判史の形態をとっていた。後者では日本の橋樑の研究が、代表であろう。
- (2) 國民黨側では、後述のように、上海は本來戦わずして下るべき手筈であったのに、中共が武器入手と労働者政府の樹立を目論んで暴動を強行した、と非難する。資本側にはまともった形のものがないが、要するに國民經濟防衛論を軸とした總括であったことは本文中でふれる。
- (3) 「情勢と任務に關する決議」。これは R・C・ノースの英譯史料を參考にした(M. N. Roy's Mission to China, Octagon Books, New York 1977, pp.246—247)。
- (4) 陳獨秀は「政治・組織・活動の總括報告」(Imprecorr. Vol. 7, No. 34)中で、「上海問題はブルジョアジー・プロレタリアートの相互關係よりなる。……都市はプロレタリアートのセンターのみならず、ブルジョアジーの要塞でもある點に留意すべきである。小ブルジョアジーと結合したとしてもプロレタリアートの力は十分ではない。……國民革命が全中國に確固とした足場をきずいた時、上海での帝國主義に決定的打撃を與えうとというのは正しい。基本的には機械論であるそれはある程度は眞理であるが、私はその議論は誤っていると思う」(拙譯)と述べ、清算主義的批判に抵抗した。
- (5) そのまともった最初の著作が、華崗のもの(註(7)参照)だが、まだそれには柔軟な評價が残されているように思われる(その一端は註(8)参照)。
- (6) 國民革命は武漢政府、廣東・兩湖の農村變革、漢口事件から南京事件に至る對外關係、それに上海での市民革命というように、それぞれが重層的に結び合わされた革命であった。
- (7) 註(1)の分類に従って、主要なものを列挙する。——部分より前のものを史料として扱った。
- (イ) 施英「上海總同盟罷工的記錄」(『嚮導』一八九九期)、同「上海工人三月暴動記實」(同一九三三期)、上海總工會「第四回全國勞働大會に提出せる上海總工會の報告書」(關西大學、東西學術研究所編譯本)、コミンテルン「上海三次暴動」(一九三〇年、司馬璐編著「中共黨史暨文獻選粹」四所收のものを利用した)、瞿秋白「上海二月二十二日暴動後之政策及工作計畫意見書」(『中國革命中之爭論問題』所收)——華崗「一九二五」

二七年中國大革命史』民國三一年、同『中國民族解放運動史』讀書出版社、民國二九年、第二卷、一七九—二〇九頁、中西功『武漢における革命と反革命』民主評論社、一九四八年、二二—三七頁、胡華『中國革命史講義』人民大學出版社、一九六三年、一七一—一七四頁、姫田光義『中國ソビエトの研究』序論『國際問題研究』第一號、三四—三八頁、J. Chesneau, *The Chinese Labor Movement 1919—1927*, Stanford U.P. 1968, Chapter XIV.

(ロ) トロツキー選集『中國革命論』(現代思想社版)、陳獨秀『告全黨同志書』(『共匪禍國史料彙編』(イ)所收)——H・アイザックス著 鹿島宗二郎譯『中國革命の悲劇』(全訂版)、至誠堂、一九七一年、一五七—一七〇頁(アイザックスの獨自蒐集史料も多い)、栗山喜博『武漢政府の崩壊過程』四・一二クデータ「まで」(『近代中國研究』第六輯所收)。

(ハ) 王雲五・李聖五編『國民革命軍北伐戰爭史』商務印書館民國二二年、吳稚暉「用眞憑實據與汪先生商榷」(吳敬恆選集、文星書局版卷一〇、吳稚暉先生全集、卷九所收)——李雲漢『從容共到清黨』中國學術著作獎勵委員會、民國五五年、蔣永敬『鮑羅廷與武漢政權』傳記文學出版社。

(ニ) (イ)の『上海三次暴動』は客観性の點でこの部類に入れられる。荷生「上海共產黨三次暴動史」(海天出版社版「現代史料」(イ)所收)、上海日本商工會議所編『時局と上海の勞働風潮』昭和二年——橋樑「上海總罷工及び其の意義」、上海資本家階級の動態的考察」(『支那社會研究』日本評論社、昭和十一年、なお、前論文の原載誌は『滿鐵調査月報』で、橋樑文中には獨

自の史料が多數含まれる)。

(8) 當時の中共全體に、この認識が一般的であったが、華崗『中國民族解放運動史』一九五頁はそれをはっきり指摘している。

(9) この點第四章で詳述するが、その理論研究の一例が、瞿秋白『中國革命的武裝闘争問題』『新青年』季刊第四號であった。

(10) 『上海三次暴動』(エ)、瞿景白『中國職工運動材料彙錄』モスクワ中央出版局、五一—六頁。

(11) 華崗前掲書一八〇頁、中國現代史研究會『中國現代革命運動史』一九三八年延安。

(12) 『上海三次暴動』(エ)。

(13) 荷生によれば、鈕は暴動期日前に夏超軍敗退の報を入手した。そのような不利を承知で、彼は暴動を發令したが、自分は「按兵不動」の態度をとり、革命気分にはやる中共の冒險主義を放置し、中共に強い不信感を抱かせたといわれる(前掲書一七二—一七三頁)。

(14) この點は第四章で述べるが、「上海總工會の復讐戰」、「上海紡績工場の罷業對策變更と總工會の躍起運動」(『滿鐵調査月報』六一九)等に詳しい。

(15) 述之「孫傳芳解散保衛團與上海資產階級」(嚮導一七〇期)、同「孫傳芳之殘暴及其末路」(同一七六期)、同「論浙江和上海事變與孫傳芳」(同一七七期)、*The Fight for Shanghai*, *Imprecator* Vol. 7, No. 5.

(16) 荷生はこれを盲動前史として位置づけて述べている(前掲書一七一—七二頁)。

(17) 荷生はこれを「上海を孫傳芳支配から離脱させ獨立させる」

「自治運動最後の目的」と呼んだ（前掲書一七三頁）。

(18) これは鈴江言一『中國解放闘争史』（石崎書店）四一三頁によるが、或いはそれは一月一日聲明のことをさすかもしれない。上海自治運動については、拙稿「北伐第一段階の革命情勢—國民革命の政治過程（その一）—」（『名古屋大學東洋史研究報告』第六號）を参照されたい。

(19) 獨秀「孫傳芳敗後之東南」（『嚮導』一八〇期）。なお、橋樑によれば、中共發行の『教育雜誌』第五號に「上海自治運動中の蘇浙皖三省聯合會」なる記事が載ったという。

(20) 『上海三次暴動』(卅)。この事實が第一章で述べた第二次暴動尙早という批判的總括となった。

(21) 橋樑は第二次暴動失敗の要因として、この點を特に重視し、「上海總罷工及び其の意義」三九四、四〇一—四〇三頁等で詳細に論じている。

(22) 「上海總同盟罷工的記錄」。

(23) 『上海三次暴動』(卅)。なお、「中共上海區祕通信」第一二號で、羅亦農は「中共が、罷市が必要といえ、商總連會はそれを決議して、通告を散布したし、上海革命委員會が必要といえ、すべての左派鈕惕生、吳稚暉、楊杏佛、ブルジョアジーの幹部虞洽卿、王曉籟らはみな革命委員になった」（吳稚暉先生全集(四)、八八三頁）と成果を誇示したが、事實は陳獨秀が吳稚暉に託びを入れねばならなかった程深刻な龜裂を生んでいたのである（吳稚暉先生全集(四)、八七八頁）。

(24) 二月二十五日前後に、コミンテルン代表をも含めた戰術會議が豫想されるが、その點は第三章で検討する。

(25) これは「上海總工會と蔣介石」（『滿鐵調査月報』七一五）に

收録された上海總工會の經過報告による。これが『時報』三月二十四日が傳える上海縣農民協會、『大阪毎日』三月二十七日の傳える當該三縣と松江の農民協會に對應すると思われる。またその動きは岳威「革命的江蘇農民」（『布爾塞維克』第一期）に詳細に記されている。この地區の中共は、毛澤東に「江浙農民の痛苦及其反抗運動」（『嚮導』一七九）で批判されたように、農村への取組みでは缺陷をもっていた。しかし、上海暴動では、勞農同盟の戰術が皆無ではなかったばかりでなく、都市・農村の變革の結合による地主・資本家反對の動きさえあったといわれている。その連携が十分強力になる前に、「四・一二」の強襲を受け、大きな打撃を蒙ったにすぎない。

(26) これはストの予先を經濟からそらして政治に集中させたことを意味するが、第四章で検討する。

(27) 「上海總工會と蔣介石」四三頁。橋樑によると、第二次暴動時のゼネスト中止決定は、商人團體の要請をいれたものであり、商總連會は「復工」を祝したという（三九八—四〇一頁）。(28) 後述のように、北伐軍の歡迎としてでなく、獨自に第三次暴動を企畫したが、三月二〇日の全上海工人緊急代表大會もまた「革命軍をまたずに」總罷業を決定した（『時報』三月二一日）。(29) 瞿秋白「意見書」では「國民革命的蘇維埃」といい、四月八日江浙委の活動者會議で羅亦農は事實上のソビエトといった。これがもたらした問題点については第四章で検討する。

(30) 第一次北伐の第二段階（漢口事件より「四・一二」まで）については、拙稿「武漢政府時期に於ける革命の轉機—國民革命

の政治過程(その二)」「(埼玉大學紀要『人文科學篇』第二九號)で詳細に検討したところである。本章は、その時の研究に基づきながら、特に第二・第三次暴動の歴史的意義を中心に再構成したものである。そのため、本章では、重複する史料の細かな指摘はそちらにまわし、最低必要なものと新たに蒐集したものを中心に掲げるにとどめた。

- (31) この時点では、中共は鈕・吳らを左派と稱し、(中共『教育雜誌』第三號—橋樑前掲書二四三頁所載、註③所掲の上海區祕通信第一二號)、侯紹裘、羅亦農、汪壽華、林鈞らは、鈕の居所や青幫首領杜月笙宅に頻りに出入りしていたという(張國燾『我的回憶』(二)五八〇頁、吳稚暉「用眞憑實據與汪先生商榷」全集版八七六頁)。

- (32) この點は『從容共到清黨』五八二—五八四頁に詳しい。

- (33) 『日本外交文書』支那内亂關係一件・國民黨ノ北伐關係・上海防備關係、一月十三日、松井(駐英大使)→幣原、*Foreign Relations of United States, 1927, Vol. II, pp. 56—58*。なお、漢口事件以後の對外關係については、拙稿「武漢政府時期に於ける革命の轉機」で詳述したので参照された。

- (34) これは一九二七年一月末時點のことである。それを示すのが、一月二十六日の中共中央の政治報告(C. M. Wilbur and J. Llenying How, *Documents on Communism, Nationalism, and Soviet Advisers in China, 1918—1927, p. 433*)であり、「中國共產黨對於時局宣言」(『嚮導』一八六期)であった。

- (35) 嚴靜文『中國現代史綱』波文書局、一九七五年、香港、一五

二頁。

- (36) 『上海三次暴動』(司馬路前掲書二六二頁)。

- (37) 同右。

- (38) 左派の上海・南京先取の事實とそれへの取組みに注目しているものには、次のようなものがある。無懷「清黨以後的上海共黨」(『現代史料』(三) H. G. W. Woodhead, *The China Year Book, 1928, pp. 820—823*。波多野乾一『中國國民黨通史』三七七頁)。

- (39) 燕塵社編『現代支那之記錄』一九二七年二月・黃浦江有外艦三十艘、『時局と上海の勞働風潮』四三—四四頁。

- (40) これを示唆するのが、鮑羅廷與武漢政權「一二〇頁掲載のマンダリヤンの回想(爲什麼中國共產黨領導破產)インブローール佛語版原載)や同書一二三頁掲載のボロジンからドブロフスキーへの書簡であるが、張國燾もこの事實を認めている(『我的回憶』(二)五九三頁)。

- (41) Tang Leang-ii, *Inner History of the Chinese Revolution, 1930, p. 275*。ボロジンは當時「日・中・ソの反英三國同盟を主張していたといわれる」。

- (42)すでに國民黨の右派・左派を狀況的に區分して使用してきているが、これを左派の性格規定としたい。中共もこの線をサポートした點で國民黨左派の一翼を構成したことはいうまでもない。しだいに明らかにされるが、右派は舊體制の支持者から成るといふより、有和的な民族主義、國家主義と黨・國家・資本家主導の非歐米的近代化のコースを志向した。

- (43) ミフ『中國革命』(外務省版、一七三頁)、『我的回憶』(五



七九一五八二頁)では、中共のこの獨自的志向を厳しく批判している。

- (44) それは第三次暴動へのコミンテルンメンバー(ゴチョフ、アルノ、チュルニスク)の参加より知られる(*China Year Book* 1928, p. 820)。

- (45) 『我的回憶』(二)五九三―五四頁。これが唯一の史料だが、それを裏づけるのが、註(40)のマンダリヤンの回想である。

- (46) 陳獨秀は註(4)の報告中で、「上海には、革命精神を失っていない若干のリベラルな資本家集團がいる」と述べた。これを、瞿秋白は、彭述之批判にことよせて、「上海の大ブルジョアジ―を利用して國民黨新右派の軍隊を牽制しようとした」と批判した(『中國革命中之爭論問題』一〇二―一〇三頁)。ミフ『中國革命』一七七頁も同様である。

- (47) 註(29)に對應。『上海三次暴動』(下)では「市民代表會議は上海ソビエトに類似した」と述べている。

- (48) 「四・一二」政變の狙いは、「上海二居ル中央執行委員五名、中央監察委員一〇名ヲ以ツテ武漢派ニ對シ本部ヲ乗取リタル上、共產黨ヲ排斥セントスルニアリ。尙右實行ノ前ニ第一ニ爲スヘキ事ハ、工人ノ武裝解除ナリ」(『日本外交文書』―「南京事件ニ於ケル支那兵ノ暴行及掠奪事件」解決交渉關係(松本記錄)四月三日、矢田↓幣原。)なお、その仕掛け人は日本であった(『日本外交文書』、「國民軍ノ北伐關係・帝國ノ態度及政策關係」、一月九日、矢田↓幣原)。

- (49) 「武漢政府時期に於ける革命の轉機」で詳述したので参照されたい。①の部分では、當事者にあたる張國燾の『回憶』(二)

五九四―五九五頁)、註(40)のマンダリヤンの回想が重要である。

- ②の部分では、トロツキーによつて公表されたチタロフ報告『中國革命論』(二三五―二三六頁)が重要である。③の左派系第六軍の武裝解除については、董顯光『蔣總統傳』(中華出版事業委員會、民國十四年、九〇頁、H・O・チャップマン著・岡虎一譯『支那革命の本質』亞細亞出版協會、九八―九九頁が重要である。

- (50) 『我的回憶』(二)五九五―五九八頁に極めて如實に語られている。

- (51) 陳獨秀『告全黨同志書』(四三一頁) Mandalyan, Why did the Leadership of the Chinese Communist Party fail to fulfill its task. (註(40)と同じ。アイザックス前掲書一九八頁所載)。

- (52) コミンテルン第八回プレナムの中國問題の決議では、中共の反蔣暴動計畫を批判している。

- (53) 嚴中平等編『中國近代經濟史統計資料選輯』一〇六頁、上海特別市政府社會局『上海之工業』、全漢昇『上海在近代中國工業化中的地位』(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第二九冊)。これについては、『嚮導』に七度にわたつて連載された施英の報告に詳し。

- (54) 拙稿「北伐第一段階の革命情勢」参照。

- (55) 「民黨政分會函工會」(『時報』三月二十一日)。

- (56) 上海總工會は、全労働者への「第二次總罷業命令書」中で、「今回の罷業は全然政治的意味であるから經濟的要求を提出してはならない」と指令した(『時局と上海の労働風潮』一三〇

頁。しかし、そのような指令は第二次セネストの際にのみおこなわれたのではなく、第一次でもそう宣言することによって、資本側の危懼を少しでも緩和しようとした（『上海總同盟罷工之記録』、「上海總罷工及び其の意義」三六九頁）。

69 『上海總工會の報告書』四九頁。なお、汎太平洋労働者會議では、彼らは、「經濟的改善も政治闘争と同時にやることなしには獲得しえないことを認識した」云々と述べたという（姫田光義「中國ソビエトの研究序論—國民革命期における政權論の形成過程」『國際問題研究』第一號）。だから、彼らは經濟要求を無視していたのではない。二十六年七月の統一要求を基礎に、第二次暴動では一七箇條、第三次では二三箇條の政治・經濟的統一要求として提出し、その實現を政治交渉の形で資本側に強く求めていた。

69 獨秀「革命的上海」（『嚮導』一六〇期）、「孫傳芳敗後之東南」（同一八〇期）。

69 中共中央第一回擴大會議の時點である。

69 「中國共產黨對時局的主張」（『嚮導』一六三期）、瞿秋白『中國革命與共產黨』七七頁、「我的回憶」（五六三頁）。

69 中央第二回擴大會議「政治報告」、譚平山「中國の情勢」（いずれも『中國共產黨史資料集』（勁草書房）（二所收）。これが國民革命期の中共の理論的到達點であった。

69 この點については、拙稿「中國國民革命と反革命—その前提をめぐって—」（『歴史評論』三三三號）を参照されたい。

64 獨秀「我們現在爲什麼爭闘？」（『嚮導』一七二期）。

69 註69参照。

69 これが張國燾であった。

67 毛澤東「連合政府論」、吳玉章「辛亥革命」。

69 『中國民主憲政運動史』進化書局、民國三五年、二三三—三八頁。

69 アイザックスはこれを三月二十九日としているが、『時報』では二十四日に成立公告を載せ、『大阪毎日』は三月二十五日に記事を載せている。その中心團體は、上海總商會、銀行公會、錢業公會、紡績聯合會等であった。經濟援助については、三千萬元公債引受は『錢業月報』七一五所載の「二五庫券之性質及吾業應募之經過」等より知られるが、他方の千五百萬元無償提供については、主に外國情報によるものであった（*North China Daily News*, March, 30, 1927. *New York Times*, April, 15, 1927. Sokolsky, *The Kuoming Tang: China Year Book 1928*. p. 1361.）。『大阪毎日』は提供者を總商會としてこそ（三月三十日）。

70 『時報』二月六日。

71 上海商民協會は、三月二十一日に成立準備會が開かれている（『時報』）。

72 「主要工業界之哀鳴」（『國聞週報』四ノ一九）、「實業界呻吟之聲」（『銀行週報』四九五期）、胡叔仁「各廠宣言中之我見」（『錢業月報』七一五）。當時の中國、特に上海等にあつて、これら定期雜誌の役割はかなり重要と思われる。『國聞週報』は、平和的な主權回復、勞資協調、蔣介石の非赤化革命への注目等、かなりまで資本側の意向を代辯したと考えられる。

73 李達『中國產業革命概觀』崑崙書店、民國一八年、龔駿「中

國新工業發展史大綱』上海商務印書館、民國二〇年、馮叔淵「民元來我國之棉紡織工業」(『民國經濟史』所收)、『中國近代工業史資料』(二ノ下)、嚴中平『中國棉紡織史稿』、同『中國近代經濟史統計資料選輯』等を参照した。

74 龔駿、李達、嚴中平等によりながら、そのおよその傾向を表すすれば次表の通りである。なお( )内は日本在華紡を示す。

年度	工場數	紡錘數(枚)	織機數(臺)
一九〇〇	三〇(二四)	八五、八五四(三九、七六)	四、五四(二、二二)
一九一二	五(二五)	一、三六、九二(六五、五九)	六、五〇(二、三三)
一九一三	六	一、五三、〇三四	七、八七
一九一五	七	一、四三、六七(一、三八、五四)	八、九一(五、九五)
一九一四	九	一、五〇、〇〇四	一〇、四一
一九一五	九(四)	一、八二、八三(一、三六、九〇)	一六、六一(七、〇五)
一九一六	七(四)	二、〇三、三六(一、四七、九七)	三、七〇(八、三三)
一九一七	七(四)	二、〇三、五八(一、二五、六〇)	三、九七(三、九八)
一九一八	七(四)	二、二八、八〇(一、五四、八六)	六、九七(一〇、八六)

75 一九二七年の華商紗廠聯合會宣言では、民國一〇年以來の「破産換主」工場を二〇餘と數え、馮叔淵は停工・減工工場は三割と評價している。

76 織順「棉紗業調査」(『東方雜誌』二二ノ一五、一九二五年)。  
77 「國權回復與經濟絕交」(『上海總商會月報』三一四)、「抵制外貨以代保護關稅問題」(同五一八)。

78 「中國紡織業近訊」(『上海總商會月報』三一五)、子明「振

興棉業與抵貨運動」(『銀行週報』四〇九號)、春木「上海大中華紗廠業給我們的兩個教訓」(『嚮導』三四期)。

79 菊池實晴「中國民族運動の基本構造」大友、一九六六、第五章はこの點を見事に解明している。

80 「主要工業界之哀鳴」は要するに、労働問題への對策に焦點があつた。資本側は、そこで、勞・資協調による産業發展を追求し、その調停者ないし強權發動者として、國家・政府に強く期待した。資本側のそのような對應を生んだそもそものが「武漢工潮」で、當時それを代辯した『商報』、『國聞週報』と、施英「論漢口之罷工潮」(『嚮導』一八一期)とでは正反對の立場が表明されてきていた。この點については拙稿「北伐第一段階の革命情勢」を参照されたい。

81 橋樑「上海資本家階級の動態的考察」二四九―二五七頁にすぐれた分析がある。

82 『嚮導』は施英による七次にわたる報告が中心であり、『滿鐵調査月報』では、「米價の昂騰と上海總工會の對策」(第六卷第七期)、「最近上海労働爭議狀況」(六―八)、「上海の社會不安」(六―八)が詳しい。

83 「五論上海の罷工潮」(『嚮導』一六七期)。

84 註(4)参照。

85 「右翼労働運動の性質」(『滿鐵調査月報』七一五)「右翼労働運動の進展」(同七一六)。

86 この點については、拙稿「武漢政府時期に於ける革命の轉機」、「馬日事變覺書」(『靜岡大學教育學部研究紀要』第二七冊)を参照されたい。

(67) この點については拙稿「北伐第一段階の革命情勢」、「武漢政府時期に於ける革命の轉機」で詳述したので参照されたい。なおこの點の理論的検討としては、小杉修二「コミンテルンにおける『民族統一戦線』の構想と展開」（『東洋文化研究所紀要』

第八〇冊）があり、多くの示唆を得た。  
 (68) 「武漢政府時期に於ける革命の轉機」七四頁以下を参照されたい。

But, because the *Ta-Ming pao-ch'ao* as issued was a nonexchangeable currency, its value deteriorated year by year. On the other hand, the silver economy infiltrated the whole country. This meant that even the Ming, which politically ruled the South from the North, was unable to unify the North and the South in the economic sphere. Nevertheless, the issue of the *Ta-Ming pao-ch'ao* was a stage the early Ming had to go through; in order to become a real unified dynasty.

## THE THREE SHANGHAI UPRISINGS AND THE CHINESE COMMUNIST PARTY

### A historical investigation of the Shanghai Revolution

BANNO Ryōkichi

This paper tries to investigate the three Shanghai uprisings, which formed one aspect of the climax of the National Revolution, while focusing on some problems of urban revolution.

This article is broadly divided into the two following themes. The first is the problem of success and failure of the Shanghai uprisings, and the second is the problem of the strategy and tactics used by the Chinese Communist Party which fully committed itself to the cause. With regard to the first theme, the questions of how the epoch-making civil revolution of the urban masses won victory, why that became the impetus for the *coup d'état* of 12 april (*ssü yi-erh* 四 · 一二), and finally why it collapsed after a short period, are examined. With regard to the second theme, the hypothesis is examined in various ways whether the commitment of the Chinese Communist Central Committee under Ch'en Tu-hsiu 陳獨秀 to the three uprisings didn't exist as a real alternative within the Chinese Revolution, although it was never actualized.

I take the following approaches towards these themes.

I. *A comparative investigation of the three uprisings.* The first, second and third Shanghai uprisings differed considerably in content. Moreover, the first one differed also from the second and third one in character and revolutionary vision. The third one was carried out under the leadership of the Chinese Communist Party which used tactics of its

own. But the attainment of the Chinese Communist Party's target of establishing a civil government in Shanghai (the *ad hoc* civil government) lead to the definite division within the ranks of the National Revolution.

II. *The liberation of Shanghai and the third uprising.* The Shanghai uprisings were not isolated from the development of the Northern Expedition and the National Revolution, but they formed a corner of the conquest in the area of Chiang-su and Chê-chiang (*Chiang-chê* 江浙). But there existed a strong disagreement between the left-wing in Wuhan and Chiang Chieh-shih 蔣介石 of the right-wing, about the strategy for the conquest of this area (with the liberation of Shanghai and Nanking as its center). Originally it was the strategy of the right-wing but, after the fall of Hangchow, the left-wing changed to the strategy of taking Shanghai and Nanking first, in accord with its target of preventing the Great Powers and the Chiang Chieh-shih-wing from getting too close to each other. Consequently, the third Shanghai uprising became a part of this strategy.

III. *The problem of capital and labor in Shanghai and the revolutionary strategy.* The Shanghai uprisings were carried out as an united front of the civil population of Shanghai, but at the center of the social situation of Shanghai in that time there existed a special labor-capital relationship. "Special" means that there were mutual relationships between the two which were not confined to purely class antagonism. The energetic devotion of Ch'en Tu-hsiu has been criticised by earlier authors as a "Shanghai-first"-policy or as right-wing opportunism. Such criticisms were made mainly from the point of view which considers democratic dictatorship of laborers and peasants, or a *soviet* as the supreme ideal. But if we take into consideration the special conditions in the biggest modern trading and industrial city of a semicolonized and semifeudal China, then we must conclude that such an evaluation is not necessarily right, and I think we have to reconsider the collapse of the Shanghai Revolution from a much broader point of view.